様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月１０日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０３３０１０９
研究課題名（和文）グローバル社会運動の発生と展開：
２００８年洞爺湖Ｇ８サミット国際市民運動を通して
研究課題名（英） The emergence and rise of the global social movement:
Focusing on the transnational civil movements in 2008 Toyako G8 Summit
研究代表者
野宮　大志郎（NOMIYA DAISHIRO）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：２０２５６０８５

研究成果の概要（和文）：地球規模で展開するグローバル社会運動（＝GSM）は 20 世紀の末から急速に発展した。GSM は、ＷＴＯ閣僚会議やＧ８サミットなど、グローバルなイベントが開催される場所で見られることが多いが、運動が形成されるダイナミズムやメカニズムについてはあまり知られていなかった。本研究では、三年の研究期間を経て、とりわけ GSM のグローバルな組織化の仕方、行動形成の仕方、また GSM を支える文化的諸要因と行った領域について、従来の研究を越えた実りある成果を提示することが出来た。

研究成果の概要（英文）：
Global Social Movement (=GSM), a form of civil action that runs throughout the globe, has emerged in the last decades of the 20th century. Its campaigns and actual activities are often observed in occasions of international political and economic events, such as the WTO ministerial and the G8/G20 Summits. Little has been known, however, about the dynamics and mechanisms in the formation of the GSM. This study has explored the emergence and the impact of the GSM, investigating from organizational phase, formation of the protest action, to its cultural factors that lie behind the GSM, and has achieved several important research findings that will be listed as contributions to the academic area of sociology and political science.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
２００９年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２０１０年度	3,100,000	930,000	4,030,000
総　計	11,500,000	3,450,000	14,950,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：グローバル社会運動、住民意識、市民活動、Ｇ８サミット、環境運動、運動の新しい質、ＮＧＯ、情報化社会

１．研究開始当初の背景
グローバル社会運動は、近年急速に発達した運動である。そのため、どのようにして運動が組織化され、どのような人が参加するのか、また運動が参加者にどのような影響を及ぼすかについて、十分な理解が得られていない。GSM に特有の、国境を越えたネットワーキングプロセスやアクション・ダイナミックスを捉える研究が渇望されていた。

２．研究の目的
(1)グローバル社会運動生成の追求：運動組織がネットワーキングを通して連帯を創り上げていくプロセスと連帯形成後に機能分

化するプロセスを解明する。
(2)参加運動主体間ダイナミックスの追求：他国から多様な人びとが集合することから生まれるダイナミズムを解明する。
(3)参加者にもたらされる影響の追求：多様な参加者の混合により起こる意識やアイデンティティなどの生成や変化を追求する。

３．研究の方法
本研究の特徴の一つは、多様な手法を用いてグローバル社会運動を包括的に捉えようとすることである。
(1)参与観察：グローバルな運動キャンペーンの現場にてネットワーキングやグループ間ダイナミックスを観察する。
(2)インタビュー：運動リーダーと一般参加者へのインタビューを通して、運動の組織化と参加者の変容を捉える。
(3)質問紙調査：運動イベントやその周辺に住まう住民への調査を通して、グローバルな運動がどのような影響を及ぼすのかを解明する。
(4)歴史的資料：運動イベントを組織した人たちの社会的背景などを解明する。

４．研究成果

(1)グローバル運動の文化的側面
とりわけ運動の文化的側面について、大きな学問上の成果があった。グローバルな運動の参加者がどのような動機付けを持って参加するのかについて、今までは、たとえば、環境や人権などグローバルなイッシューに動機付けられた人たちがグローバルな運動に集まると考えられていた。しかし、グローバルな反戦平和運動の分析からは、歴史的かつローカルな動機付けを持った人たちがグローバルな運動に参加する場合もあることがわかった。
　他方、キャンペーンレベルで観察すると、運動を組織するリーダーたちのグローバルなメンタリティが、運動キャンペーンの質を左右することがわかった。すなわち、グローバルなメンタリティを持つリーダーのいるキャンペーンでは運動はグローバルになり、他方、ローカルなメンタリティをもつリーダーが中心となるキャンペーンでは運動はローカルかつ小規模なものになる。
　これらの結果を総合すると、運動参加のメンタリティは重層的で、かつレベルによって多様であることがわかった。
　また集合アイデンティティについても、グローバルな社会運動では希薄なものとなることが確認された。この結果は、多様な言語を話す人びとが集まる結果、キャンペーンの主張は単純明快なものになりやすい、という当初の予想通りであった。

(2)グローバル運動の組織的側面
　またグローバルな運動の特徴とされる、組織的参加を前提としない参加も存在することが確認された。特にアナキズム系活動家、そしてグローバルに活動を行なう個人は、次のキャンペーンが開催される場所に入り、その地で、あるいはキャンペーンに参加する瞬間にグループを作り活動する、という光景が見られた。
　他方、グローバルに活動する個人の中で、一つのキャンペーンから別のキャンペーンに移動する複数の個人も観察された。これらの個人は、世界中のどの町でキャンペーンが行なわれようと、登場する。彼らは相互に顔見知りになり、緩やかなネットワークを形成していた。
　通常、キャンペーンを組織化する際には、キャンペーン開催地の地元あるいは当該国の市民活動団体や運動リーダーが、国際市民グループないしは国内諸団体との調整をおこなう。このようにして国境を越えて活動家を招致する仕組みができあがることがわかった。また、キャンペーンのグローバル化には、「インフォツアー」などさまざま手法を編み出しながら、努力がなされている状況であることも観察された。
　一つのキャンペーンに限定してみると、おおよそどこのキャンペーンでも、NGO 系団体と社会運動系団体との間に溝があった。この溝こそが、グローバルな運動のあり方を規定していると推測される。

（3）運動の影響
運動が一般社会に及ぼす影響についても、大きな学問上の収穫を見た。今まで社会運動研究では、運動が周囲の人にどのように見られているかについての考究が乏しかった。本研究の対象であるグローバルな社会運動は、一つ一つの運動キャンペーンが大規模なものであるゆえに、周辺住民に与える心理的影響には大きなものがある。
　調査の結果、一般住民のなかにも、いくつかの反応があることがわかった。まず、キャンペーンはそれが行なわれる当該地域を有名にするとの積極的反応があった。他方、運動が地域内を騒擾状態にするのではないかという不安反応があった。これらの反応を示した一般人以外に、運動を行なう参加者に積極的な賛意と同感を示す一般人もいた。これらの人びとの「温度差」が、周囲の一般社会が運動を受け入れる程度の差になって現れると考察される。Ｇ８洞爺湖サミットの際のグローバルキャンペーンとその後の海外でのグローバルキャンペーンを比較観察してみたところ、日本では運動と運動外部との間の境界が比較的はっきりしていることがわ

かった。すなわち日本のグローバル運動は周囲の一般住民から「孤立」した状態でなされている。

（４）運動とメディア
メディアが運動の一部となることは従来から指摘されてきた。しかし、グローバルな社会運動では、独立系メディアが、より大きな働きをすることがわかった。まず情報の搬出路が YouTube など多岐にわたって世界中に網の目を張る状況であること、さらのキャンペーンの現場で多様な国からのメディアが交錯して活動することなどから、情報の交換が世界レベルで瞬時に行なわれる状況がある。更に現地のキャンペーンサイトでの情報はすぐに本国に送付される。これらの過程を総合すると、グローバルな独立系メディアは、運動を「リフレクシブ」なものと特徴付けることに大いに役立っている。

（５）運動の当事者
運動に参加することとはいかなることか。本研究では、ある活動家の経験を通して、個の意味を探求する機会を得た。けだし、グローバルな運動に当事者として関わることは、自分が自らの体に貼付けて生きてきた諸々の「アイデンティティ」指標を引きはがしながら、生きることでもあった。それは、グローバルな運動キャンペーンに参加して、共通の言語を持たない、かつ出自も知らない初対面の相手を最初から「信じること」からスタートする。そして唯一見つけた共通点は、「空腹と食べたいという欲求」であったという。運動が当事者としてそこからスタートするかどうかはさらなる考究が必要だが、グローバルな運動は、そこに参加する当事者を、このような領域にまで連れて行く可能性を秘める。

（６）グローバル運動の理論
グローバルな社会運動が急速に進展した社会的背景についても、本プロジェクトは考察を行なった。進展の背後にある要因のひとつは「情報社会」という現代社会の特性である。個人や社会集団ではなく、情報そのものが社会のノードとなり、そこに人びとが集まるとう社会構成のあり方がグローバル運動の背後に見える。また「公共」のあり方が変動したことも背後にある。すなわち「公共」が単に国境を越えて形成されたことのみならず、それが、従来は異質とされ社会的に排除されていたものまでその構成単位として受容するという質的な変化を経験している。こうしたことがグローバルな社会運動生成の根底にある。

（７）運動の新しい「質」
総じて、グローバル社会運動は、従来の運動にはなかったいくつかの形質を有していると結論づけられよう。それは、個人レベル、そしてキャンペーンレベルでの組織構成のあり方、その中に当事者として、あるいは一般人として、あるいは組織として参加する参加者に一様の新しい経験を強いる。また、運動を創り出す過程で、ローカルで歴史的な動機付けを援用することもあれば、まったく新しい「グローバル」なメンタリティを保有する事もある。これらのことは、従来の運動には見ることが出来なかったものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１８件）

(1) 西城戸誠・山本英弘・青木聡子・渡邊勉. 2011. 「メガ・イベントによる社会関係資本の蓄積過程-洞爺湖サミットに向けての取組みを通して-」. 人間環境論集 11巻1号 Pp.47-65. 査読有.

(2) 濱西栄司. 2011.「自律スペースの現在と＜調整＞：国際サミット時のローマ・コペンハーゲンと日本」. インパクション 178号 Pp. 22-33. 査読有.

(3) Hamanishi, Eiji. 2010. “Los Movimentos Sociales Japanese vistos a traves de la Configuracion de Actores en torno a la Cumbre del G8, 2008.” Veredas: Revista del Pensamiento Sociologico, vol. 21: 199-214.査読有.

(4) Nomiya, Daishiro. 2009. “Under a Global Mask: Family Narratives and Local Memory in a Global Social Movement in Japan.” Societies Without Borders. Vol 4(2): 117-140. 査読有.

(5) Yazawa, Shujiro. 2009. “Two Interpretations of the Japanese Information Society.” Labor, Education, and Society. Vol.14:239-252.査読有.

(6) Nomiya, Daishiro. 2009. “Are Global Protest Movements More Regionalized?: The Case Study of the 2008 G8 Summit.” APARC Dispatch. 2009January Issue. Pp.1-2. Asian Pacific Research Center. Stanford University. 査読無.

(7) 濱西栄司. 2009.「トゥレーヌ社会学の

中心的テーゼの確立・展開：強い社会運動論の可能性、脱フランス化、日本」．　現代社会学理論研究　Pp. 129-140. 査読有.

〔学会発表〕(計２９件)

(1) Nomiya, Daishiro (Invited). 2011. “Structure vs. Agency: What Makes a Global Social Movement Global?” First Multidisplinary Science Forum (Invited Speech). University of Washington. USA. March 11-12, 2011.

(2) Nomiya, Daishiro. 2010. “Turning It Global: Global Mentality in Social Movements.” International Conference of the East Asian Sociologists Network. Pusan Maritime University. South Korea. October 29-30, 2010.

(3) Yamamoto, Hidehiro. 2010. “A Japanese View of Social Movements: Why Do Japanese People Refrain from Participating in Social Movements?” International Conference of the East Asian Sociologists Network. Pusan Maritime University. South Korea. October 29-30, 2010.

(4) Hamanishi, Eiji. 2010. “Typology of Global Movements around International Summits: Toyako G8 Summit and Others.” International Conference of the East Asian Sociologists Network. Pusan Maritime University. South Korea. October 29-30, 2010.

(5) Yazawa, Shujiro. 2010. “Civilization Analysis in Sociology.” International Conference of the East Asian Sociologists Network. Pusan Maritime University. South Korea. October 29-30, 2010.

(6) 山本英弘. 2010.「日本人の社会運動感：日本人はなぜ社会運動に参加しないのか.」第 50 回数理社会学会大会. 獨協大学. 2010 年 9 月 10-11 日.

(7) Nomiya, Daishiro. 2010. “Continuity and Disjunction.” World Congress of Sociology, International Sociological Association. Gothenburg, Sweden. July 11-17, 2010.

(8) Hamanishi, Eiji. 2010. “Global Movements around G8 Summits: Cross-national Organizational Characteristics.” World Congress of Sociology, International Sociological Association. Gothenburg, Sweden. July 11-17, 2010.

(9) Higuchi, Takuro. 2010. “Activist Network Involving Asia.” World Congress of Sociology, International Sociological Association. Gothenburg, Sweden. July 11-17, 2010.

(10) Yamamoto, Hidehiro. 2010. “How Did the Citizens React Anti-G8 Movements: Analysis Based on Sapporo Citizens’ Survey.” World Congress of Sociology, International Sociological Association. Gothenburg, Sweden. July 11-17, 2010.

(11) 西城戸誠・山本英弘. 2009.「グローバルイベントによる地域社会への影響とローカルガバナンス」．　地域社会学会.　岡山大学. 2010 年 5 月 9-10 日.

(12) 山本英弘・渡邊勉・青木聡子・西城戸誠. 2009.「グローバルイベントと市民社会」. 日本社会学会. 立教大学. 2009 年 10 月 10-11 日.

(13) 濱西栄司・樋口拓郎.　2009.「2008 年洞爺湖サミットをめぐる日本の若者の運動」. シンポジウム「日本とフランス　若者たちの肖像」.　関西日仏会館. 2009 年 5 月 27 日.

(14) Nomiya, Daishro. 2008. “Under a Global Mask: Family Narratives and Local Memory in a Global Social Movement in Japan.” Social Movement and Political Sociology Workshop. Stanford University. November 12, 2008.

〔図書〕(計 12 件)

(1) 矢澤修次郎. 2011. 地域社会学編.『キーワード地域社会学』. Pp. 140-141, 236-237. ハーベスト社

(2) Kawano, Yuko, Robert Pekkanen, and Yamamoto, Hidehiro. 2011. 『The Routledge Handbook of Japanese Politics』. Routledge, pp117-129.

(3) 西城戸誠. 2010.「当事者へのかかわりと当事者としての「実践」を考えるー社会運動論・環境社会学の私的な経験から」. 宮内洋・好井裕明編著『＜当事者＞をめぐる社会学ー調査での出会いを通して』, Pp. 41-65. 北

大路書房

(4) 山本英弘・西城戸誠・青木聡子・渡邊勉. 2009.「洞爺湖サミットと市民参加に関する調査報告書」. 124 ページ. 法政大学人間環境学部.

(5) 矢澤修次郎・小山花子（共訳）. 2009.『インターネットの銀河系』. 350 ページ. 東信堂.

(6) 西城戸誠. 2008.『抗いの条件－社会運動の文化的アプローチ』. 301 ページ. 人文書院.

〔その他〕
ホームページ
http://ja.gp-am.jp/
（プロジェクト終了により、HP も終了した）

６．研究組織

(1)研究代表者
野宮　大志郎（NOMIYA DAISHIRO）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：20256085

(2)研究分担者
矢澤　修次郎（YAZAWA SHUJIRO）
成城大学・社会イノベーション学部・教授
研究者番号：20055320
（H20：研究分担者→H19, H21～連携研究者）

西城戸　誠（NISHIKIDO MAKOTO）
法政大学・人間環境学部・准教授
研究者番号：00333584
（H20：研究分担者→H19, H21～連携研究者）

(3)連携研究者
大畑　裕嗣（OOHATA HIROSHI）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：10176977

平林　祐子（HIRABAYASHI YUKO）
都留文科大学・文学部・准教授
研究者番号：30329578

渡邊　勉（WATANABE TSUTOMU）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：30261564

荻野　達史（OGINO TATSUSHI）
静岡大学・文学部・准教授
研究者番号：00313916

山本　英弘（YAMAMOTO HIDEHIRO）
山形大学・地域教育文化学部・専任講師
研究者番号：20431661

青木　聡子（AOKI SOKO）
名古屋大学・環境学研究科・専任講師
研究者番号：80431485

(4)研究協力者（国内）
二階堂　晃祐（NIKAIDO, KOSUKE）
明治学院大学・非常勤講師

藤田　泰昌（FUJITA, TAISUKE）
慶應義塾大学・COE 特別研究員

片野　洋平(KATANO, YOHEI)
鳥取大学・農学部・助教

濱西　栄司（HAMANISHI, EIJI）
ノートルダム清心女子大学・文学部・
専任講師

(5)研究協力者(海外)
Doug McAdam. Stanford University (USA). Professor: Advisory Board.

Steffan Walgrave. University of Amsterdam (Belgium), Professor: Advisory Board.

Iosif Botetzagias. University of Aegean (Greece). Lecturer: Advisory Board.